

0 目的（概要）

本報告の目的は、現代の若者の社会意識を明らかにすることである。その指標として、2002年に「青少年研究会」（研究代表：高橋勇悦）が実施した東京・神戸の若者（16-29歳）へのアンケート調査を用いる。調査分析結果を提示するだけでなく、現在主流となっている若者を否定的に扱うイメージとを重ねる作業を通じて、若者を利用する支配者（「大人社会」）の目論見を解き明かすことにしたい。加えて、既存の分析視点では、新時代の若者文化を把握しきれないという限界がみられる。そのための新たな視点の必要性についても提起したいと考えている。

表 報告の流れ<イメージ>

問題関心	現代の若者の社会意識を知りたい
調査分析	現代の若者の社会意識を記述する
解釈枠組	現代の若者の社会意識を解釈する
仮説継続	現代の若者の社会意識をさらに知るためには

1 問題関心

- ・世間で言われるほど、若者は「なっていない」のか？
バッシングあれこれ
（少年犯罪凶悪化に見る規範の崩れ）
（『下流社会』『他人を見下す若者たち』のベストセラー化）
（新聞の投書・・・路上／電車内／携帯マナー）

2 調査結果（含む データ概要）

- ・社会意識（道徳・規範を主としてたずねた項目）は高い／大きな社会への意識は低い
- ・<高+平均> - <低>グループ比較
関係のある項目／関係のない項目

3 結果からみえてくるもの

- ・通説 既存の社会支配層の意図
社会不安の扇動／処罰対象の低年齢化／愛国心の強化
- ・現行秩序の維持・持続が目的
保守層の利権（新秩序への嫌悪）／スケープゴートとしての若者
若者自身も体制に取り込む

4 真面目な大学生（「生徒化」した大学生）

- ・どうして、社会意識が高いのか（体制に従順）合理的・・・とりたてて反抗する必要がない
- ・大学生調査データ（1997／2003）

出席率の UP / 学業比重の意識

不況・就職困難

GPA・シラバス・カリキュラム・授業評価

・「学校化」社会とその帰結としての「生徒化」

学校文化 / 青年文化 / 消費文化

・発達段階と「学校」

高校 / 大学・・・大人を子どもとして扱う

小学 / 中学・・・子どもを大人として扱う

大人 - 子どもの境界設定が不明確になる：どの局面においても真面目は義務化される

そのことによって、欠落する思考・排除される思考：シナリオ通りにいく？

5 世代文化

・「大人社会」に抵抗する若者は少数

対立軸が見えない・・・世代内で共有する物語はない（1970 年代以降）

・すべてが体制に従順と言い切ってよいか？

私案 A 長期的な視野に立った抵抗

私案 B 表面上の従順（深層部での反抗）

私案 C 抵抗・反抗という言葉では、もう若者文化は説明できない

・数字にあらわしていない変数の設計

操作概念 / 分析方法

ヒントとしての「グループ間で関連のない項目」

6 まとめ

・何がみえたか

若者の社会意識は非常に高い（問題を提起することはない）

社会意識を統制する支配層の目論見がある

その目論見に従う社会構造、若者自身の意識がある

・何がみえないか

すべてがシナリオ通りになるはずもない

「新しい」若者文化が見えていない（独自の思考が存在するはず）

既存の枠組みを踏襲しているだけでは、これが限界

7 補足

・本の反響；書評 / 若者バッシングへのバッシング（メディアに取り込まれていく）

< 主要文献 >

浜島幸司「若者の道徳意識は衰退したのか」浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房、
2006 年、第 6 章

張江洋直・浜島幸司「大衆教育社会と 自己実現の物語」『稚内北星学園大学紀要』第 6
号、2006 年